

氏 名 かわ ばた なお と
川 畑 直 人
学位(専攻分野) 博 士 (教育学)
学位記番号 論教博第81号
学位授与の日付 平成11年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
学位論文題目 非行臨床における心理力動的的理解と治療的介入
— 行動化と自己理解・洞察の観点から —

(主査)

論文調査委員 教授 齋藤久美子 教授 岡田康伸 助教授 伊藤良子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、顕在化した逸脱行動が問題視される非行の問題を、内面から心理力動的に理解し、心理臨床的援助の方法を研究しようとするものである。Aichhorn (1925), Friedlander (1947), Redl & Wineman (1951, 1952), Winnicott (1956, 1967) など心理力動的観点からの先駆的な貢献に注目しつつ、Patterson (1974), Sarson (1978) など認知・行動論にも視野を広げた展望が試みられている。それを通して、相対的に少数派である精神分析的アプローチの意味を再検討し、個人の内側の心理力動と対人的相互作用を結び合わせて捉える立場を選択している。すなわちAron (1996) などの視点を重視しつつ、非行臨床の立場に立脚した理論的・実証的研究が進められた。

第Ⅰ部では、心理力動的心理学の観点から、非行臨床について理論的な検討を試みている。非行の定義、非行臨床の現状に関わる問題を、特に心理療法の適用の観点から論じ(第1章)、非行への心理力動的アプローチに関して、①精神分析学において展開されてきている行動化概念、②心理力動論における非行理解、③精神分析的な非行治療を展望している(第2章)。また、心理療法における基本的な仕事と考えられる自己理解・洞察の概念について検討し(第3章)、最後に、非行臨床において自己理解・洞察を促す働きかけを可能にするための、治療構造のあり方について、モデルの提示を試みている。

上記の問題意識から、非行臨床現場における著者自身の実践事例に基づく、具体的な検討を以下のように展開している。

まず第Ⅱ部では、投影法による心理査定を通じた、非行の心理力動的的理解に焦点を当てている。第4章では、鑑別所被收容少年のロールシャッハ反応における、平凡反応を吟味し、非行行動の意味を精神内界の特徴に基づき考察し、第5章では、行動化様態を異にする窃盗非行二事例について、自我機能の違いをロールシャッハ反応と事例史から比較検討した。

第Ⅲ部では、非行事例への治療的介入の問題に焦点が当てられた。第6章では、非行少年に乏しい自己表現を喚起する治療的な働きかけの工夫が、ロールシャッハ施行場面を活用して試みられている。具体的には(1)潜在反応喚起的付加手続き(反応の要求水準の低下、反応例の提示)、(2)自由反応促進的な付加手続き(対話的テスト状況の設定、解釈のフィードバック)という付加的な手続きを考案し、鑑別所に入所した3事例をもとに、その診断的および治療的な意味を考察している。第7章では、少年院に收容中の少年のカウンセリング事例につき、治療的介入のポイントとしてコミュニケーション・パターンに注目しながら、ロールシャッハ・パフォーマンスと面接場面の対話行動を照合させる検討を試みた。第8章では、家庭裁判所と少年鑑別所が機関連携した事例について、少年への心理療法過程と提携の各意義を考察している。言語表現の乏しい少年に、貼り絵を媒体としたカウンセリングを行い、治療的な自己理解の展開を、連携が果たした役割とともに全体的に検討している。

終章では、①非行臨床におけるアセスメントから治療的介入にかけて、心理力動的的理解が果たす役割、②自己を語り出さうような介入の工夫と、語りの質的变化に伴う自己理解の展開、③非行臨床において処遇環境全体が果たす役割について、総合的考察を展開している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、非行少年と直接かかわり合う当事者の位置での臨床実践体験を理論的・実証的にとらえ直したものである。少年非行に関しては、審判を含む司法の論理や管理・矯正の体制が優勢な現状の中で、少年自身の内面世界を問い個別の心理療法的介入を指向する立場は、ともすると前者と相反するものに見られ、少数派の位置づけを余儀なくされている。

そうした中で本論文では、少年を病理的にとらえて自己責任性をあいまい化することを避けながら、少年自身の自己理解を支援する関わり方を理論的・方法的に探究しようとの意欲的挑戦が展開されている。その先駆性、独自性と具体的な成果は、本論文の大きな特長である。

展望されている多様な理論的立場の中から、精神分析的な心理力動理論を選んでいる点も、少年の多面的な自己表出データを全体的に総合して少年の個性的な心的世界にアプローチしようとする著者のスタンスに照らすと、まさに不可欠な理論的基盤として納得できる。つまり、本論文は行動化水準、投影水準、対話的自分語り水準のそれぞれにわたる自己表出・表現データ全体を相互に結び合わせる総合的な理解の実現が意図されている。それはいわゆる「行動化」を「自己理解・洞察」の対極に位置づける古典的な考えを脱して、「行動化」が含み持つ心理力動的メッセージ性に注目する近年の理論的展開を踏まえたものである。

本論文では、たとえば第5章と第6章など、多面的メッセージの受けとめ方が具体的に検討されているが、顕在化した逸脱性「行動化」の側が突出しているのに比べ、その他の回路での少年の自己表現・伝達は不活発である。特に意識化や言語化による内省的自己表現の乏しさにどう対処するかが課題となるが、本論文ではロールシャッハ法による事物表象に託した投影水準の間接的自己表現データの活用が独創的に工夫されている。それは投影的表現そのものも豊かとは言えない少年の潜在反応（“shadow response”など）を掬い受ける方法、また内界との疎通活動を活性化する方法の具体的な工夫を独自に加えたものである。そして、更にそうした内省的自覚の外にある心的現実データを少年にフィードバックし、少年自身による逸脱行動の再理解への道を開きながら、全体としての自己再体験化、自己理解へと結びつける具体的手続きが提示されている。それらの方法の案出がもたらす新鮮な効果が説得性を持つものとして評価された。

本論文におけるもう一つの工夫は、面接状況で少年の自己表現を解放・促進し、対話関係での全体的な自己再構築へとつなげていくための二者間「関係性」の地盤形成である。それは理論的研究において検討された「安全基地」効果やコミュニケーションの親密性の創り出しを中心とする課題である。これに関しては著者がそれを暗黙のうちに進めながらも、十分明確化し切っていない嫌いがあるが、たとえば第8章のように、非言語的手作業と対話関係との平行状況の効果などが提示され、臨床的現実がよく伝えられている。

以上全体として本論文では、①理論と実践との間の、②複数回路の顕在的・潜在的、あるいは直接・間接の自己メッセージ相互間の、③自己理解と「関係性」との間の、更には④少年自身にとっての行動化と自己理解との間の、といったいくつかの間の重要な「橋わたし」が大きな潜在テーマになっているかと思われる。その点では①や③にまだ十分でない問題が残っていることや、更には今回の非行をめぐる研究知見をより広く心理臨床一般にどう活用していくかなど今後を待つ課題が指摘されよう。しかしすでに述べた通り本論文全体の水準や、先駆性、独創性、理論的・実証的研究の充実度は高く評価されてよい。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成11年2月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。